

### 資料3

#### どうしようこ 銅鉦鼓

#### <概要>

法 量 鼓面径 26.3cm 口径 27.6cm 厚 5.9cm 側縁厚 3.4cm  
耳幅 5.8cm 耳厚 0.7cm 撞座径 8.5cm 口縁厚 1.0cm  
時 代 鎌倉時代（元徳二年、1330年）

本品は、<sup>ががく</sup>雅楽用の鉦鼓である。銅・<sup>かどぼ</sup>鑄造で、肩が角張り、<sup>こうもり</sup>甲盛<sup>1</sup>は高いが直線気味に高まっている。内側から2条<sup>2</sup>、子持三条、2条の隆帯をめぐらし、側面にも細い隆帯を1条めぐらしている。内面には<sup>ばち</sup>撥の<sup>だこん</sup>打痕がよく残っている。また、側面に以下の銘を刻んでいる。

奉施入 正鼓一 遠江國 濱名大福寺常住物

元徳二年 <sup>庚</sup>午<sup>壬</sup>六月八日 沙門良範

撞座の蓮華文が蓮弁を描かずに蓮肉の外側に長大な<sup>しべ</sup>蕊をめぐらし大粒の<sup>ずいとう</sup>蕊頭を連ねるのも南北朝期に顕著になる特色である。

本品は、三河・尾張・遠江地域における最古の雅楽用鉦鼓として工芸史的な価値が高い。

---

1 甲盛：表面が滑らかに盛り上がる曲面に仕上げられた状態。

2 条：すじ。すじ状のもの。

どうしょうこ  
銅鉦鼓



表面



裏面

(愛知県教育委員会提供)